

第3回及びワーキングの振り返り

1 第3回(7/16)の振り返り

(1)子どもの居場所、学びと活動の充実に関する検討

居場所について

- 居場所とは、ほっと安心できるところ、仲間と活動できるところ、話を聴いてもらえるところ、学校のように何か評価を受けないところなど、色々な捉え方がある。
- 中野区のすべての子どもに居場所があるかどうか。
- 既存の居場所が子どもの思いや意見を反映したものになっているか、また、反映する仕組みがあるかどうか。
- 多様な子ども(不登校、外国ルーツ、障害…)の居場所があるか。
- 学校は、子どもが一日のうち大半の時間を過ごす場所であり重要である。
- 中野区は中高生向けの居場所が手薄だと言われている。中高生施設を整備をするときに子どもの声を聴いていくことが大事。
- 子育てひろばは空いてる曜日や時間が限られている。居場所について考える上で、「いつでも空いている」ということはとても大切である。
- 夏休みなど学校が長期休みとなる間の居場所が必要である。
- 公園の使い方でクレームが来ることがある。プレーパークなど自由に遊べる場所の確保が必要である。
- 区民活動センターをもっと活用できないか。管理の問題など、未成年ならではの問題はあるが、子どもたちが自由に出入りできる場所を作ることができないか。
- 高齢者会館を上手に活用できないか。高齢者と子どもがお互いのニーズを共有し、使い方の工夫を考える話し合いの場があると良い。また、高齢者が昔の遊びを子どもに教えるなど、交流が生まれると良い。
- 統廃合により現在使われていない学校施設を活用し、子どもが活動する場所や居場所ができると良い。

体験について

- 中野区では、町会の有志の方が各小学校区で色々な体験の場を用意してくれている。
- 公園でも子ども向けの企画や体験イベントを実施している。
- 利用方法や申し込み方法を簡単にしてほしい(区活の抽選申し込みや往復はがきが必要となる企画など、申し込みのハードルが高い)。親も忙しいので、申し込みのハードルが高いことで、申し込みの機会を失い、結果として子どもの体験等の機会が失われ

てしまうことがある。内容の充実も大事だが、申し込みの工夫も含めて子どもの体験の機会を増やしていくにはどうするかを検討していきたい。

(2)子どもの権利侵害の防止、相談・救済に関する検討

- 相談しようと思ったときになかなか予約がとれないという話を聞く。
- (大人の話であるが)相談に対して話を聞いてもらうだけで、具体的なアドバイスがもらえないという話を聞く。子どもに対しても実は同じようなことが起きているのではないか。
- いじめ防止アンケートを行った後、それがどう生かされるのかが子どもたちには伝わっていないと思う。こんな風に解決された、という事例を広報するなどのフィードバックをしてほしい。「相談してね」という広報は様々なされるが、相談した後どうなるのかが分からない。そこを丁寧に取りこぼさず行ってほしい。
- 子どもは本当に電話で連絡できるのか。電話をして知らない人と話すことは、子どもにとって非常にハードルが高いのではないか。タブレットを活用して相談ができないか。
- 学校だと保健室の先生が相談しやすい環境にあると思う。保健室の先生が子どもの権利について知識を持っていると良い。
- 相談員が巡回して学校等に出向き、顔の見えるコミュニケーションができる機会があると良い。どんな人に話を聞いてもらえるか分かり、また一緒に遊んだりすることで、子どもの心理的なハードルが下がり、安心して相談できるのではないか。いつでも相談に乗れる体制をとっていることを子どもに伝えることができると良い。
- 相談窓口が書かれたカードなどを都度もらうが、子どもはすぐなくす。タブレットを活用して周知できると良い。
- まずは自分の気持ちや悩みを吐き出せるか、安心して話をできる人や場所があるかということが大切である。居場所がまずは子どもに寄り添い話を聞く場所となり、そこから相談救済につなげていくことができる。
- 大人がヘルプできる場所も分かりやすく発信する必要がある。

2 ワーキング(8/4)の振り返り

(1)中間答申(案)について

「1 現状と課題」について

- 現在進みつつある意見聴取も盛り込みながら、子どもの現状と課題として、区長に報告する。

「2 子どもの権利保障の基本となる考え方」について

- 委員会で大事にしたい考え方をまとめたい。
- 言葉にならない思いを含めた、意見を言える子どもだけではない様々な子どもの声を踏まえて計画を策定していく。
- 「子どもだけでなく、保護者の負担感も含めて誰にでもやさしいまちを目指していく」ということが大事なことで浮かび上がってきたので、考え方としてまとめたい。
→学校の先生や保育士も余裕がないことがあるので、そこも考えていけると良い。
- 世代の異なる年代の方々が対立するのではなく、世代を超えて相互に理解し、一緒に考えていく、という議論が委員会の中で出ている。
- 子どもの本音を聞くスキルは、学校、家庭、地域のすべての大人に求められている。
「子どもの意見や本音を聞くのは、先生や家庭の役目」というような悪い意味での線引きをしてほしくない。
- 子どもの参加について、様々な子どもに合った参加のスタイルを保障していくことが大切である。
- 多数派だけを捉えるのではなく、誰一人取り残さず、少数派にも目を向けることを打ち出せると良いのではないかな。

「3 取組の方向性」について

<子どもの意見表明・参加の促進>

- 子どもの意見表明を具体的に進めていくために、研究者などの学識経験者のバックアップを受けながら、子どもの参加の手引きを作成すると良いのではないかな。
- 子どもの意見表明に関しては、学校や児童館などの身近なテーマを扱ってほしい。中学校の校則などの学校に関することについて子どもの意見を聴く体制を作ってほしい。
- 児童館に行っていない子どもたちの意見を受けとめる仕掛けがあるといい。児童館に行っている子どもは満足しているから行っているが、行っていない子どもや排除されてしまっている子どもが「こんな児童館があったらいいな」ということを言えると良いのではないかな。

- 子ども会議においても、児童館の運営などについて語れるようになると良い。
- 子どもの意見を聴いた後に、その意見を受けて変わっていくプロセスを仕組みとしてきちんと位置付けることが大切である。意見を聴いて終わりではなく、その意見がどう反映され、地域がどう良くなっていくかが分かると子どもは参加することになってくるのではないかな。
- 遊具の設置に際して子どもにアンケートをとった取組は素晴らしいと思ったが、意見を聴いた結果が子どもには届いていなかったと思う。聴いた結果こうなった、という発表の仕方には工夫が必要であったと思う。
- 子どもが意見を言える雰囲気をつくるのが大切だと思う。ある中学校で子どもの意見を集約して進めていく中で、その場に同席した先生が腕組みをして構えて、子どもの意見をことごとく潰していく、ということがあったと聞いた。子ども会議や学校で行われる生徒会などにおける先生の関わり方について、子どもが発言できるような雰囲気づくりのアドバイスができると良いのではないかな。
- 先生が認めるテーマについてしか発言しない、校則など問題に思っていることを発信できないと感じている子どもがいる現状があると思う。
- 子どもの意見聴取で出向いた際、まずは子どもに近寄ってもらうことからスタートした。発言しにくい、構えてしまう、といった子どもの不安感などを払拭することが大切である。
- 子どもの本音を引き出すサポートの役割をするファシリテーターの養成も必要である。
- アンケートなどで子どもの意見を聞くとときには、QRコードなどを活用して気軽に回答してもらえらる仕組みがあると良いのではないかな。
- 一時保護の対象となった子どもなど、困難な状況にある子どもの意見聴取を行うときには様々な配慮が必要になる。
- あるテーマについて子どもと保護者が家で話し合うような宿題があると面白いかなと思う。
- 区のハイティーン会議について、参加することに消極的な子どもは、参加することに対して何らかのハードルを感じているはずである。子ども会議に自ら参加したいと思う子どもはどんな子どもだろうか。また、どうすれば子ども会議などに子どもが積極的に参加するようになるだろうか。
- 子ども会議で出た意見を行政がどう受け止めて取り組んだかをきちんとフィードバックすることが大切である。また、イベント的にやりとりを行うのではなく、日常的に対話がなされる仕組みが必要である。

- 子ども会議のメンバーが誰なのか、しっかりと位置づけを行う必要がある。また、乳幼児や小学生の子ども、ティーンの子どもの、外国籍やLGBTのなど、多様な子どもの意見をどう聴いてどう反映していくか、ということも大切である。
- 子ども会議に参加してくれた子どもがユースになったときに、今度はサポート側に回れると良いのではないか。

<子どもの権利侵害の防止、相談・救済>

- スポーツ虐待などの日常的なテーマから子どもの権利を考えるような大人に対する権利学習があると良いのではないか。
- 社会的養護の子どもや不登校の子どもなど、困難を抱える子どもについても取り上げて良いのではないか。
- 電話相談は心理的なハードルが高いため、LINEを活用した相談など、子どもがアクセスしやすいツールを検討していくと良いのではないか。
→相談への心理的な負担の軽減だけでなく、誰かに相談したけれども悩みが解消されずに苦しんでいるような子どもを救済につなげるために、子どもがアクセスしやすい方法を検討する必要がある。
- 相談窓口に相談したら、「誰が」「どのように」相談に応じてくれて、「どのように」解決に向けて動いてくれるのかということ、また「こんな相談をしても良いんだよ」ということを具体的に子どもに示せると良いのではないか。

「4 推進体制、取組の評価・検証」について

- 計画の評価・検証では、「子どもが自分を肯定できているか」という視点は大事にした
- い。
- 数値の目標だけでなく、子どもの主観や感覚をアンケートで把握し、指標にしていくことも大切にする必要がある。
- 子どもへのヒアリングなど、参加型の評価も併せて行い、区全体で行うアンケートだけでなく、数字に表れにくいマイノリティの子どもたちの声を拾った上で、検証を行って行くことが大切である。

その他

- この中間答申を区長に報告する際、子どもに対する回答として、「区長から何らかの発信をしてほしい」ということを委員会としても求めていきたい。

(2)子どもへの意見聴取の実施状況の共有

- 難しかった。年齢幅もあり、また外国にルーツがある子どもへの意見聴取であったが、一緒に遊んで信頼関係を一定程度築いてから、遊びの合間に聴いて実施した。「分かりやすく、正しく伝える」という部分が難しいと感じた。
- 大人に通じる単語が子どもには通じない。「あなたは何をしているときが楽しいか」とそのまま聴いても答えてくれない。まずは子どもに友達だと思ってもらい、その子にあった聴き方をしないと意見をもらうところまでたどり着けない。難しい思ったが、非常に良い経験だった。
- 子どもへの意見聴取は、我々大人が、まず経験することが大切であり、試行錯誤しながら子どもの声を聴くスキルを高めていくことが大切である。
- 「自分が変えられるならどこを変えたいか」ということを聴くと、日常で感じている問題や変わったらいいなと思っていることなど、今子どもが感じていることを聴くことができる。
- 障害のある子どもは、その障害の程度によって接し方や話せる内容には幅があり、難しかった。意見聴取のフォーマットにこだわらず、その子どもが話せることを聴き取った。
- 聴取している子どもも大切だが、周りの大人の雰囲気や周りの大人がどのように接しているかを見ることも大切だと感じた。
- 子どもを支えるスタッフがどのようなことを求めているかを聞く機会があっても良いのではないかと思った。